

## 日本PC事始 その2

デバイス屋が創ったNECの  
パーソナルコンピュータ「PC-8001」

後藤富雄（インテリジェントディスク㈱ 取締役）



## 第一回「West Coast・Computer Fair」

「TK-80」を発売した翌々年1977年4月サンフランシスコのシビックセンターで第一回「ウエストコースト・コンピュータフェア」が開催され、小生も興味深深、勇んで出かけた。そこで見かけたのはホビーとは一線を画した、スモールビジネスタargetの実用的なシステムであった。マイクロプロセッサ用のFORTRAN、COBOLまでであった。日本では中小企業向け小型オフコンのジャンルである。その中でもコモドル社の「PET2001」とアップル社の「Apple II」が異彩を放っていた。どちらもホビー、組み立てマニア向けでない完成システムであり、CPUはMOSテクノロジー社の6502プロセッサ、BASICインタプリタがROMに書き込まれており、電源オンですぐ立ち上がる。「PET」はモノクロームCRT、キーボード、カセットテープデッキを一体化したオールインワン。



写真1 コモドル社PET2001試作品

「Apple II」では後にビジネス用途のカラー・アプリとなる表計算ソフト「Visicalc」のデモ版が走っていた。コンピュータマニア向けのマイコンから誰でも使える個人用パソコンへの大きな潮流を感じて帰国した。会場で出会った西和彦（当時アスキー社長）、安田寿明（当時東京電機大学助教授）氏も小生以上に敏感にそれを感じとり、以後業界に向けて

パソコンの将来を説く役割を担われたのである。電卓事業で大成功し、ミスター・カリキュレータと呼ばれたコモドル社トラミエル社長は、発表時のコメントで「将来このパソコンは100ドルになるだろう」と豪語していたことが懐かしい。

BASICの使えるパソコンを作って欲しい

「ビット・イン」でお客様の相談にのっていると、いろんなことが分かってきた。技術者に混じって、普通の人々からの相談が増えてきた。タイプライタのように文章やデータを自由に入力し、保存し、取り出したい、と言う声も聞こえてくるようになった。その頃、パソコン雑誌などにBASIC言語で書かれたゲームや簡単な実用ソフトが掲載されはじめ、BASIC言語の使えるマイコンへの期待が増していた。1978年には日立の家電事業部から「ベーシックマスター・レベル1」、シャープの部品事業部から「MZ-80K」が発売され、マイコンキットで先発した我々には相当なプレッシャーであった。BASICのROMとビデオ表示回路を搭載した拡張ボードとキーボードのセットで売り出したり、オートカセットテープドライブを内蔵した完成品「COMPOBS」も発売したが、市場の反応は悪かった。この頃が電子デバイス部門で始めたキット事業の限界で、パソコン事業への転進を決断せねばならない分岐点でもあった。この点に関しては、事業の推進者であった渡辺和也部長（当時）の揺るぎない信念と会社上層部への夜討ち朝駆けの説得努力、それを非公式に認めて泳がしてくださった、故大内専務（当時）や澤登電子デバイス販売事業部長（当時）の支援が大きかった。そんな背景を知るや知らず我々技術者は本格的な完成品パソコンをめざして開発に専念することが出来たのである。

「使えるパソコン」を目指した

先行する日立もシャープもその商品イメージは、まだまだアマチュア、マニア向けであり、実用的な訴求は無かった。我々はビジネスの世界でも安心して使ってもらえるような、高性能だが安価な「見え

るパソコン」を作ることにした。これまでの体験から自然に得られたコンセンサスであった。市場投入がやや遅れたとは言え、結果的にはそれが幸いしたように思う。

最新のデバイスで、性能・品質で最高の製品

CPUに自社製μPD780（ザイログZ80互換）、CRTコントローラに開発途中のμPD3301D、FDDコントローラにはμPD765を採用し、画面表示は80文字×25行が表示可能とし、業務用端末としても遜色ないものをめざした。最先端のLSIの設計情報を、社内の設計者からどこよりも早く知ることが出来たことは開発を進める上で徹底的に有利に作用していたのである。フルキーボードは社内の電子コンポーネント事業部に押しかけてキータッチの感触を損なわずにコストダウンをするようお願いしたもので、結果的には市場での評判は良かった。メインボードもプリント基板事業部に協力を仰ぎ、当時最高のファインピッチのものを最短のリードタイムで製作していただいた。

デファクト・スタンダードのBASICをROMに搭載

BASIC言語の決定に当たってはデファクト・スタンダードになれるかどうかを最優先し、社内開発中の処理スピードでは断然優れた土岐氏（当時入社2年目、学生時代からBASICを自作マイコンで走らせていた）の書いたBASICの採用を見送り、先発の「アップルII」や「TRS80」でも使われているマイクロソフト社製BASICを採用することにした。私は急遽シアトルに飛び、ゲイツ社長と会いPC-8001のスペックを伝え、納期と値段の交渉をおこなった。シアトル空港に着くとゲイツ氏が運転する車に乗せられ、そのままワシントン湖畔の自宅に連れて行かれ母親手づくりのディナーで迎えられた。

西氏の戦略で、日本の大手コンピュータメーカーとの最初のOEM契約への執念が良く理解できる。あの時の契約金額は本当に安いものであり戦略価格であった。良くも悪くもその時から我々はマイクロソフトの傘のもとで事業を推進してゆくことになるのであった。BASICにPC-8001用のグラフィック機能等を追加する作業は土岐氏が旧マイクロソフト本社の小さなオフィスに駐在し、発売間近まで続けてもらった。

プリンタとフロッピーディスクドライブは純正で

実用面で必須の周辺機器は自社ブランドで発売することにした。プリンタは帳票印刷にも使えるドットインパクトタイプのものを特別仕様で、東京電気

（当時NECのマイコンの大口ユーザ）からOEM購入した。フロッピーディスクは5インチで、2ドライブを一体に納めた外部装置として発売した。CPUバスへの直接接続による不安定性を逃れるために装置側にもCPUを持たせ、パラレルポートで接続する方式をとった。半導体デバイスを多用する贅沢な設計は、チップ価格の低下を予測できる我々の得意なところであった。



写真2 PC-8001本体とモニター

この様なコンセプトで開発された「PC-8001」は79年5月の第3回マイクロ・コンピュータ・ショーの開催に合わせ発表、会場のデモ機の前は黒山の人だかりの好評を呈した。本体16万8000円に決められた価格は3年間一度も下げることなく売れ続けた後、日本語処理のため漢字ROMを搭載し、グラフィックの解像度も上げた「PC-8801」シリーズとして日本のパソコンの第一世代をリードし、次の16ビットパソコンのベストセラーである「PC-9801」へとバトンが渡されたのであった。

偶然にもマイコン、パソコンの黎明期に立ち会い、半導体デバイスの素晴らしい仲間、上司とともに夢のある仕事に参加させていただきました。お世話になりました多くの皆様に感謝を申し上げます。

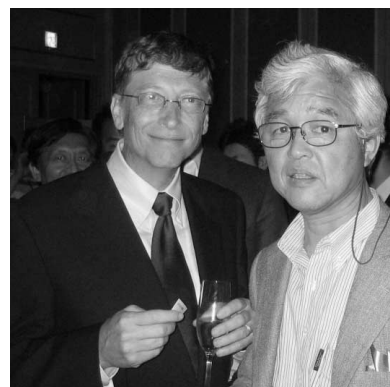


写真3 ビルゲイツ氏と筆者（2005年）